しようと考えるのである。しかし、このような私の目論見はすぐにはずれてしまった。日本人留学生の受け入れ実績があり、大学院も設置されているので、パプアニューギニア唯一の総合大学であるパプアニューギニア大学を留学先に選んだのであるが、先方から「博士課程の学生は研究指導できないので、留学生として受け入れることはできない」との連絡が届いたのである。全く予想外の事態だったため大いにあわてたが、急きょ留学先を変更して、オーストラリアの首都キャンベラにあり、ニューギニア研究において先導的な役割を果たしてきたオーストラリア国立大学太平洋研究所に留学することにした。

調査地（パプアニューギニア南部高地州）のファス族の友人たちと

太平洋研究所の人類学研究室には世界的に著名な人類学者が多数在籍し、優秀な院生が世界各地から集まっていた。院生全員が奨学金の給付を受けて研究を進めており、全員に個別の研究室が割り当てられていた。また、院生の現地調査資金も研究所が提供していた。このような人類学の世界的研究拠点の一つで研究を進めることができたのは、まことに幸運なことであった。一流の研究者たちから研究に関するさまざまなアドバイスを得ることができたし、図書館に行けば、日本では入手不可能だった文献資料もたやすく手にすることができたのである。私も研究室を割り当ててもらったが、何とそれは直前まで名誉教授が使っていた広大な研究室だった。たまたま空いていたからとのことだったが、スタッフも、院生も、研究者としては同等に扱うというリベラルな姿勢を強く感じた。そして、一年後には、他の院生と同じように、パプアニューギニアで一年以上にわたる現地調査を実施することができた。オーストラリアへの寄り道は、とても有意義な寄り道だったわけである。

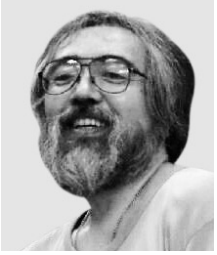
三〇年後の現在

当時の日本の大学院に比べると、太平洋研究所の研究環境は圧倒的に優れていた。院生が現地調査を実施し、その成果を博士論文にまとめるまで、資金面でも、研究を補助するスタッフの充実という面でも、ほぼ理想的な環境が整っていた。当時に比べれば、現在の日本の大学院も研究資金等の面では飛躍的な研究環境の向上がみられる。しかしながら、それに見合っただけの研究成果が得られているかとなると、多少疑問を感じざるを得ない。研究を指導する側に回った現在、豊かな研究環境から優れた若手研究者が多数現れて先進的な研究を進めることを大いに期待するのであるが、残念ながら、それがなかなか実現しないのである。この背後には、日本の若手研究者養成に関する政策的な問題があることは十分に承知しているが、それでもなお、現在の研究環境を活かして若手研究者がどんどんと伸びていってくれるという可能性の方にかけ続けたいと思う。

本奨学事業は、日本万国博覧会記念機構（http://www.expo70.or.jp）の助成金を得て実施している

地球最後の秘境ニューギニア

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
同大学副学長
栗田博之（くりた ひろゆき）



国際文化教育交流財団一九八一年度奨学生。七八年東京大学教養学部教養学科卒業。八〇年東京大学大学院社会学研究科修士課程修了。八一年よりオーストラリア国立大学太平洋研究所留学。八八年より東北学院大学専任講師、九四年東京外国語大学外国語学部助教授を経て、九九年同教授。二〇〇九年より現職。

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一八三名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

地球最後の秘境

パプアニューギニアは、依然として日本から最も「遠い」国の一つである。オーストラリアのすぐ北隣に位置しているため、ヨーロッパやアフリカ等の国々に比べれば、地理的にははるかに日本に近いし、太平洋戦争を経験した世代には、激戦地としてその名は広く知られている。しかし、マスコミ等でパプアニューギニアが取り上げられることは極めてまれで、その国情はほとんど知られていない。たまにテレビ番組でパプアニューギニアが紹介されることもあるが、その時には、決まって、「地球最後の秘境」といったキャプションとともに、人々が「石器時代の生活」を送っているかのような姿が映し出され、現代日本からは遠く隔たった世界として描き出されるのである。

パプアニューギニアのあるニューギニア島は、グリーンランドに次ぐ世界第二の大島であり、周囲を珊瑚礁に囲まれた「南の島」というよりも、むしろ小さな大陸と考えた方がよい。赤道近くにあるため、島全体は熱帯雨林のジャングルに覆われているが、中央山脈には標高四〇〇〇メートルを超える高峰があり、草原が広がる中央高地地帯では時に霜が降りて作物に大きな被害が出ることもある。植民地化されたのは十九世紀後半であるが、内陸部への探検は険しい地形と敵対的な住民の抵抗に阻まれ、高地地帯に人が住んでいることが「発見」されたのは一九三〇年代のことであった。また、全土がオーストラリア植民地行政府の統治下に入ったのは、一九七五年の独立直前のことであった。その意味で、パプアニューギニアは確かに「地球最後の秘境」であるが、このイメージが先行するあまり、そこに生きる人々がわれわれと同時代人であるという事実がしばしば忘却されてしまうのである。

オーストラリア経由パプアニューギニア行き

このような国の大学にわざわざ留学しようとするのは、私のように文化人類学を専攻する学生くらいのものであろう。留学先の大学で研究を進めると同時に、キャンパスから離れて、現地調査を実施